

<b>Title</b>	ヘルマン・ヘッセ『デミアン』：シンクレールの成長を中心に
<b>Author</b>	図越, 良平
<b>Citation</b>	人文研究. 19 巻 6 号, p.421-445.
<b>Issue Date</b>	1968
<b>ISSN</b>	0491-3329
<b>Type</b>	Departmental Bulletin Paper
<b>Textversion</b>	Publisher
<b>Publisher</b>	大阪市立大学文学部
<b>Description</b>	

Placed on: Osaka City University Repository

# ヘルマン・ヘッセ『デミアン』

—シンクレールの成長を中心に—

図 越 良 平

## I 作品成立当時の事情

『デミアン』は1917年、ヘッセが40歳の時に成立し、1919年に出版された。本作品の成立の事情に関しては、すでによく知られていることとも思われるが、作家と作品のよりよき理解のために今一度そのことに触れてみたいのである。何よりも重要なのはこの作品が、ヘッセ自身にとって危機の時代に成立したということである。1914年7月に第一次世界大戦が勃発し、その2ヶ月後に彼は「新チューリヒ新聞」にあの有名な訴え『おお友よ、この調子をやめよ！』<sup>1</sup>を發表するが、ドイツの新聞からは翌年に同様な意見の表明をとりあげて攻撃され、「変節漢」、祖国の裏切り者という烙印を押されることになるのである。<sup>2</sup>その「ゲーテ的な態度」をロマン・ロランから称えられ、彼との親しい交際が始まるようになったことは、ヘッセにとって大きな慰めではあっただろうが、同胞からかように罵倒されたことは何といっても大きな衝撃であつたといわねばならぬ。

戦争勃発と共に、彼はベルンのドイツ領事館に出頭し（彼は1912年以後その地に住んでいる）、奉仕を申し出、ここで捕虜の慰問を行い、『ドイツ抑留者新聞』《Deutsche Internierten-Zeitung》の共同編集者（1916—17）となり、さらに『ドイツ捕虜のための日曜報知』《Der Sonntagsbote für die deutschen Kriegsgefangenen》の編集者として活動する。そして彼自身、自分の短い作品をも含めた『ドイツ捕虜文庫』《Bücherei für deutsche Kriegsgefangene》を出すのである。<sup>3</sup>

自分に対する前記のような誹謗とこのような数々の仕事の疲労に加えて、個人的不幸——即ち、1916年に父の死、末の息子マルティンの重病、そして妻マリア・ベルヌイの精神病の発病と入院——が彼を襲い、彼自身ノイローゼにかかるのである。ウンゼルトが引用する『自伝素描』（1925）からの次の言葉は、当時のヘッセの内的な状態を理解する上に極めて重要であると思われる。

「しかし今度は内省がおこなわれずにはいなかった。いくばくもなく私は、自分の苦しみの責任を自分の外部にではなく、自己の内部に求めるようにしいられ



ているのを知った。なぜなら、全世界の狂気と粗暴とを非難する権利は、人間にも神にもなく、ましてや私にはないことを悟ったからである。私がこのように世の成行きと衝突したとしたら、私自身の中にいろいろな混乱があるにちがいがなかった。実際、大きな混乱があった。自分のうちのこの混乱をつかまえ、その整理を試みることは、愉快なことではなかった。<sup>5</sup>」

ヘッセは1916年の5月から翌年11月まで、J. B. ユングの弟子であるラングのもとで、ノイローゼ治療のためおよそ60回にわたる精神分析を受ける。バルによれば、ラングがヘッセにもたらしたものは、医学的な知識に全くとらわれることのない、生き生きとした解明 (Aufschluß) であり、現実的空想的な哲学と生活形式 (eine aktuelle, phantastische Philosophie und Lebensform) であった。そしてこの医師がカトリックであることにふさわしく、自己の赦罪 (Selbstabsolution) を厳格に斥けることであった。<sup>6</sup> ヘッセのノイローゼに関して、さらにバルは、ヘッセが幼年時代から抱いておりながら、邪推深く冷やかな周囲の世界を前にしてあまりに長い間隠されていて、その成就をひたすら待っている一つの宗教的な象徴の世界のあったことを指摘し、ラングが慣習的な殻を打破り、心を脅かす数々の夢の像を取り上げて、それを伝統的な象徴の列につなぐことに成功した時、多くの効果が得られたことを説明している。<sup>7</sup> ラングは作品中ではピストリウスの姿で描かれているが、<sup>8</sup> 要するにこの作品は精神分析の体験の産物として形成されたものである。

以上で主としてヘッセの戦争体験と個人的不幸という点について眺めたわけであるが、次に彼の創作活動の面について少し考察してみたい。『デミアン』以前の、それもいわゆる初期の作品に親しんでいる読者がはじめてこの作品を読んだ時、恐らく、素朴な読後感からしても、両者の間には顕著な質的な差異のあることを認めるに違いなかろう。それほどこの作品は特異で印象的である。では一体その相違はどこから生じてくるのか。それはヘッセ自身の創作活動に対する厳しい反省に由来しているのである。彼は『自伝素描』の中で次のように素直に告白している。「私は少年時代の長い苦しい戦いによって、世間で地位をから得、今は詩人であると思っていた。その間に、成功と安泰とは私にありふれた影響を及ぼし、私は満足し、ものぐさになっていた。よく見れば、詩人は娯楽ものの筆者 (Unterhaltungsschriftsteller) とはほとんど区別がつかなかった。私はあまりらくになりすぎていた。」<sup>9</sup> ジオルコウスキーはこの点を取りあげ、ヘッセの言葉に同意している。<sup>10</sup> ヘッセはさらに言う。「私は世界のいっさいの戦争と殺意、いっさいの軽はずみと粗野な享楽欲と臆病さとを、自分自身のうちに再発見した。



そしてまず、自分自身に対する尊敬を、それから自分自身に対するけいべつの気持を失った。そして混沌のかなたに再び自然と純真さを見いだす希望が、しばしば燃え上り、しばしば消えるのであったが、混沌の凝視をつきつめることに専念した。<sup>11</sup>（圈点は筆者）自己自身の内なる混乱の認識と、混沌の中を行く強い覚悟——これが『デミアン』以前の「甘苦いメランコリーに色づけられた」作品から、ヘッセを切離す重要な契機となっているのである。

さてここで本作品に関しての重大な事実に注目しなければならない。それはこの小説が最初(第8版まで)匿名で出版されたということである。即ちその標題は《Demian. Die Geschichte einer Jugend. Von Emil Sinclair》となっている。<sup>13</sup>そして1919年、このエーミル・シンクレールなる「新人作家」にフォンターネ賞が与えられたのであるが、E・コロディによって、匿名の秘密があばかれるや、ヘッセは賞を返し、第9版以後標題を《Demian. Die Geschichte von Emil Sinclairs Jugend. Von Hermann Hesse》と改めた。ジオルコウスキーは、「ヘッセに匿名を使うよう促したのは文学的なセンセーションナリズムを求める欲求ではなかった。ヘッセは実際もはや一般の人々が非常によく知っていたのと同じ作家ではなくて、新たな名と清新な名声を持つ権利のある全く異なった人なのであった」<sup>14</sup>と述べ、ヘッセが以前の自分と同一視されることに対して反抗したのであると言っている。<sup>14</sup>ともかくこうしてヘッセの自覚に満ちた再出発が始まるのであり、ここにわれわれは彼の詩人としての誠実さをみてとることが出来るのである。最後に、匿名出版の時に『デミアン』を読んだトーマス・マンの感想に耳を傾けよう。「…最近私は文学的な強い印象を受けました。最初『ノイエ・ルントシャウ』誌に載り、今またフィッシャー書店で本となったエーミル・シンクレールの『デミアン、ある青春の物語』のことを言っているのです。私は非常に感動し心が満たされています。そしてその著者や彼の年齢等について熱心に問合わせました。もしお暇でしたら、この物語を読んでごらん下さい。私の考えでは、それは何か非凡なものです…」<sup>15</sup>（J・ボンテンに宛てた手紙）マンのこの言葉は、何にも増して、この作品の文学的価値の高さを証明するものと言えよう。

## Ⅱ 手法上の諸問題

本作品のファーベルは次の通りである。

明るい家庭に育ちながら、嘘の盗み話をしたために悪友に脅迫されて、次第に悪の道へ踏み込み絶望に陥っている時、ある力強い友人の出現によって助けられ、以後さまざまな苦悩と希望との繰返しの中に、常に彼に導かれ、以前から求めて



いた彼（その友人）の母にも会うことが出来、遂に彼の死によって真の目覚めに到達する一人の若人の物語。

この小説は Ich-Erzählung の形式をとり、全体は序から始まり、本文は8つの章から成る。序と第8章とを除き、各章とも全集版で20ページ前後という外的には安定した構成を有している。作品の冒頭に本小説の中心テーマを暗示するモットーが掲げられ、さらに各章には、聖書と神話を連想させる意味ありげな標題がつけられている。さて、われわれがまず注目しなければならないのは、「序」の部分である。本作品の場合それは、無名の一市民が手記の編集者として登場する『荒野の狼』の序や、また無名のカスターリエン人が語る『ガラス玉演戯』の序とは根本的に異なる性格を持っている。即ち、ここでは、種々の事柄を実際に体験した主人公自身が語っているのである。先にわれわれは本作品が最初匿名で出版されたことをみたが、その場合には語り手が「私の物語」という時、その「私」はそのままこの「新人作家エーミル・シンクレール」その人であり、読者は仮に最初から、作品が文字通りの実話でないと仮定していたにせよ、とに角現実存在するシンクレールの物語ということで、「ヘッセ作」となった時よりも、はるかに大きな、物語に対する信憑性を持っていたのではないかと思われる。しかし、シンクレールが仮空の人物であることが判明したところで、信憑性が著しく損われるという懸念はないと見るべきである。読者は一応作者であるヘッセのことを忘れ、語り手のシンクレールなる人物に注意を集中すればよいのであり、或は無意識的に主人公の中にヘッセの姿を思い浮べて読んでいるかも知れない。要するに Ich-Erzählung のもつ不思議な力によって、読者は作品の世界そのものの中に没入してしまうのである。論を元に戻し、「序」の部分を少し詳細に検討し、本作品の提示形式の巧みさを眺めてみよう。まず物語方法に関して語り手は次のように述べている。

《Die Dichter, wenn sie Romane schreiben, pflegen so zu tun, als seien sie Gott und könnten irgendeine Menschengeschichte ganz und gar überblicken und begreifen und sie so darstellen, wie wenn Gott sie sich selber erzählte, ohne alle Schleier, überall wesentlich. Das kann ich nicht, so wenig, wie die Dichter es können. Meine Geschichte aber ist mir wichtiger als irgendeinem Dichter die seinige; denn sie ist meine eigene, und sie ist die Geschichte eines Menschen – nicht eines erfundenen, eines möglichen, eines idealen oder sonstwie nicht vorhandenen, sondern eines wirklichen, einmaligen, lebenden Menschen.》<sup>16</sup>



この文章の前半は明らかに叙事文学的全知 (epische Allwissenheit) の物語態度を説明しており、本小説ではそのような手法を放棄することを読者に告げ知らせる。そして、視点の限定された Ich-Form に徹するのである。しかし、後半の文章には特に注目すべき必要がある。そこには「物語り」ということ自体をも否定するような言葉が見られるではないか。〈erfunden〉, 〈möglich〉, 〈ideal〉, 〈sonstwie nicht vorhanden〉を打消し、「現実の、ただ一度きりの、生きている人間」の物語がとり扱われているというのである。このことはそれと同内容の〈ein wirklich lebender Mensch〉, 〈die Menschen, deren jeder ein kostbarer, einmaliger Versuch der Natur ist〉, 〈einmalige Menschen〉等の言葉によって強調されている。ところで、自分自身という点から出発して、次第に自分自身を超えた個々の人間の存在というものにまで考えが及んでいることに注意すべきである。

《Jeder Mensch aber ist nicht nur er selber, er ist auch der einmalige, ganz besondere, in jedem Fall wichtige und merkwürdige Punkt, wo die Erscheinungen der Welt sich kreuzen, nur einmal so und nie wieder. Darum ist jedes Menschen Geschichte wichtig, ewig, göttlich, [...]》<sup>16</sup>

ここにわれわれは本質的な意味に於ける個人の尊厳と尊重の態度を読みとることが出来るのである。シンクレールの物語が彼にとって重要であるというのも、ほかならぬそういう意味において重要なのである。さらに彼は言う。

《Meine Geschichte ist nicht angenehm, sie ist nicht süß und harmonisch wie die erfundenen Geschichten, sie schmeckt nach Unsinn und Verwirrung, nach Wahnsinn und Traum wie das Leben aller Menschen, die sich nicht mehr belügen wollen.》<sup>17</sup>

この「すべての人間の生活のように」という言葉から、シンクレール個人の物語が同時に他人の問題に繋がっていることがわかるのであり、ここに叙事文学的綜合 (eine epische Integration) が成立しているのである。

本文の方の構成はどのようになっているであろうか。シオルコウスキーは、それがエピソード風の構成であるとし、そのような構成は主人公を広く同時代の文化的な影響にさらすことを可能にする一方、構成の一貫性は、人生肯定に向う若者の内的な成長に焦点を置くことによって引き出される旨述べ、<sup>18</sup>「主人公を、自分の代表するグループ（普通は秘密の団体）の主義に従って教育するところの精神的な指導者（即ち本作品ではデミアン）が存在する」点に、この作品が伝統的なロマン派教養小説の特徴を有していることを指摘している。<sup>18</sup>しかしヘッセがこ



の伝統的な形式を用いながらも、それを變形し拡大している点として、①かのグループによって表わされているところの理想を内面化していること、②予示(prefiguration)の使用による構成、③神話と象徴とを特に現代風に用いることによって小説の意味を広くしていることを挙げている。<sup>19</sup>「グループ」というのは本小説の場合デミアンの属している団体という意味に解せられる。理想の内面化とは自分の理想を外の世界に求めず、自己の内に求めることを意味する。<sup>20</sup>②の予示とは、元来「旧約聖書の中の人物や出来事が新約聖書とその救済の物語の予示である」<sup>21</sup>という意味において使われる用語であるが、ジオルコウスキーはこの関係が『デミアン』の中に用いられていることを指摘するのである。即ち、本作品中に見られるある種の人物や出来事が、聖書の中の出来事を予示していると解してよいと思われる。<sup>22</sup>彼はさらにこの小説の基本的な構成要素が、聖書の figura <sup>23</sup>であり、それは種々のエピソードを形成するためにヘッセが用いた旨述べている。例えば「カインとアベル」、「二人の罪人の話」、「ゴルガタの物語」、「放蕩息子」、「ヤコブの戦い」、「二つの世界」(第1章の標題。善と悪との伝統的な、キリスト教の二分説を表わしている)、「エデンの園の門」、「失樂園」、「エヴァ夫人」等がそれである。この中、「放蕩息子」、「エデンの園の門」、「失樂園」等の言葉は、われわれ日本人には、本文の中でほんの比喩的な意味にしか使われていないと思われ、ともすれば読み過ぎてしまうかも知れないのであるが、しかしキリスト教の環境の中に育った西洋人には聖書からの一語一語が、われわれには想像もつかぬほどの強烈な印象と連想とを与えるのであろう。ヘッセがこうした手法を用いていることについて、ジオルコウスキーは、それによってヘッセの芸術的な創意が少いとされるのではなく、まさにそうすることによって、他のやり方ではつくることが不可能であつたろうと思われる深遠さと、無時間性と神秘感に到達していると言うが、これは当を得ていると思われる。ジオルコウスキーはまた、教養小説としての本小説が、ある出来事に対して焦点を合わせるエピソード的なプロットをもっており、シュティフターの『晩夏』やノヴァーリスの『ハインリヒ・フォン・オフターディンゲン』のような伝統的な教養小説の、なめらかに進んで行く展開ではなくして、むしろ熱狂的で間断的な成長をと<sup>24</sup>り扱っている旨述べている。

ところで彼は本小説の主人公シンクレールの年齢を10歳から20歳までの間とし(これは本文を読めば明らかである)、その年代は1904年或は5年から1915年ま<sup>25</sup>でと定めている。その根拠は明示されていないが、これは恐らく、本作品の最後の場面が戦争の勃発となつているところから、その年を1914年として、その後



(即ち、デミアンの死後に)この記録が書かれたものとして逆算していったのであろう。しかし、作品の中の戦争を現実の第一次世界大戦と関連づけることは意味あることだとしても、仮空の人物であるシンクレールの内的生活と現実の時間との間に一体何の関係があるのかまことに疑問である。ジオルコウスキーは、ある個所で、「次の年(1913年)の秋、シンクレールは大学町でデミアンに会う」<sup>26</sup>という風な言い方をしているが、このような年号表記に一体何の意味があるのだろうか。実際、作品のどこを見ても、戦争という事実以外、歴史的な意味での外的現実の出来事などは全然描かれていない。描かれるのはもっぱらシンクレールの内的発展の過程のみである。それとも、そのような年号をも架空のものとするのであろうか。仮にそうしたところで、シンクレールの内的生活には何の重要性をも加えることにならないのは明らかである。例えば、第1章に於けるシンクレールの苦しみは、1904年とは何の関係もないことである。そのような事柄はいつどこにでも起りうる、ある意味では平凡な、しかしまた重大な出来事であり、われわれはまず事柄と少年の心理状態そのものに注目すべきなのであって、時代との関連はこの場合考える必要がないのである。

本作品のテーマは極めて明確であり、それは人間の内的な成長ということである。そしてこのテーマを具体的に展開させ、作品を有機的に構成するものとして数々のモチーフが使われているが、その中心となっているのは、孤独、絶望、憧れ、夢、母等である。これらが密接に組合わされ繰返されているのであるが、それについては次のⅢに於いて論じるつもりである。

一方、伏線についていうなら、まず第一に「カインのしるし」があげられる。第2章においてはじめてデミアンがこのことを語るのであるが、その後たびたびシンクレールはそれに言及している。その個所を次に拾い上げてみよう。

①少年シンクレールが父に対して一種の軽蔑感をいだいた場面——《Ja, da hatte ich [Sinclair] selber, der ich Kain war und das Zeichen trug, mir eingebildet, dies Zeichen sei keine Schande, es sei eine Auszeichnung [...]

②シンクレールがデミアンに対して予感めいたものを感じた場面——《Ud es schoß mir [Sinclair] unklar durch den Kopf: - ist nicht er [Demian] selber, dieser Demian, so eine Art Kain?»<sup>27</sup>

③デミアンの詰問に脅えたシンクレールがカインの話を思いうかべる場面——《Ich [Sinclair] bekam von neuem Angst. Die Geschichte von Kain fiel mir plötzlich wieder ein.》<sup>28</sup>

④シンクレールがカインの物語について父に尋ねる場面。以上は「カイン」と標題のついている章(第2章)であるから、そのことについて多く述べられているのも当然ではある



が、特に①②は読者に対して何か異様な予感を与えるのである。⑤堅信礼前の授業の際の牧師の話——《Da begann der Pfarrer mit erhobener Stimme eindringlich vom Kainszeichen zu reden.<sup>31</sup>》⑥最後まで悔い改めない罪人に対するデミアンの言葉——《Vielleicht ist er [der Schächer] auch ein Abkömmling von Kain.<sup>32</sup>》(以上第3章) ⑦年上の学生ベックとの談笑の中でカインの話をするシンクレール——《und mitten drinne gab ich die Geschichte von Kain und Abel zum besten!<sup>33</sup>》(第4章) ⑧ピストーリウスから去った時、シンクレールは自分にそのしるしを感じる。——《Und damals spürte ich zum erstenmal das Zeichen Kains auf meiner Stirn.<sup>34</sup>》(第6章) 以上でカインのしるしについて、そのことに言及された個所を眺めたわけである。しかし、これだけでは解決にはならない。この伏線は次の第7章においてその意味が明らかにされるのであるが、それは内容の問題にからんでくるが故に、次のⅢにおいて触れることにする。

今一つの重要な伏線は「鳥と卵」である。まず最初は鳥だけが問題になっている。しかも作者はカインの話の場合のように何か重大な問題を含んでいることを思わせる風ではなく、シンクレールの家の玄関の戸の上についている紋章のことをデミアンが彼に気づかせることから始めている。①《Es ist ein Vogel oder so was Ähnliches, es muß ganz alt sein<sup>35</sup>》(第2章) ②紋章の鳥の夢をみるシンクレール——《In der Nacht träumte ich von Demian und von dem Wappen.<sup>36</sup>》③その鳥の絵を描くシンクレール——《Ich ging nun daran, ein neues Blatt zu malen, den Wappenvogel. Wie er eigentlich aussah, wußte ich nicht mehr deutlich, und einiges daran war, wie ich wußte, auch aus der Nähe nicht gut mehr zu erkennen, da das Ding alt und oftmals mit Farbe überstrichen worden war. Der Vogel stand oder saß auf etwas, vielleicht auf einer Blume, oder auf einem Korb oder Nest, oder auf einer Baumkrone.<sup>37</sup>》(第4章) そして特に③は次の「鳥は卵の中からぬけ出ようと戦う」と題される第5章への伏線となっているのである。④デミアンの家の戸の上に自分の鳥の絵がかけてあるのをみて驚くシンクレール——《Oben an der dunkeln Holzwand, über einer Tür, hing unter Glas in einem schwarzen Rahmen ein wohlbekanntes Bild, mein Vogel mit dem goldgelben Sperberkopf, der sich aus der Weltschale schwang.<sup>38</sup>》⑤シンクレールの絵について語るエヴァ夫人の言葉——《Sie [Sinclair] haben unserem Max nie eine größere Freude gemacht als mit diesem Bild<sup>39</sup>》このような謎に富んだ出来事が最終的には、



最後の方の場面でのシンクレールの幻想に於いて明瞭に意味づけられるのであるが、それも次のⅢにおいて述べるつもりである。

以上で大体重要な伏線について考察したわけであるが、次にこの小説における一つの顕著な点を指摘しておきたい。それは非常に神秘的とも言える出来事が起ることである。はじめから見ていくならば、まずデミアン自身に時たま見られる異様な表情、彼の読心術（第2章）と他人の意志を支配する術（第3章）、居所のわからぬデミアンに鳥の絵を送りその返事をもらったシンクレール——《Mein gemalter Traumvogel war unterwegs und suchte meinen Freund. Auf die wunderlichste Weise kam mir eine Antwort.<sup>40</sup>》（第5章）、自殺を企てようとする学友クナウエルのところへ引かれて行くシンクレール——《Es zog mich [Sinclair] her. Hast du [Knauer] mich gerufen? Du mußt mich gerufen haben.》<sup>41</sup>（第6章）、一度も会ったことのないデミアンの母を異常なほど熱心にさがしまわるシンクレール——《Ich fuhr rastlos von Ort zu Ort, jedem Einfall nach, immer auf der Suche nach dieser Frau.》<sup>42</sup>（第7章）等である。

以上は物語の外的事件と思われる部分についての考察である。それだけに一層このような出来事はわれわれに不可思議に思われるのである。シンクレールが「現実の中でよりもより多く夢の中に生きる人間」<sup>43</sup>であることや、また、「この夢の中で体験した」と現実で体験したことを、私はずっと前からもうはっきり区別することができなかった」という言葉から、この一見、外的に見える出来事もすべて彼の夢の中で生じた事柄と見なすべきなのか。しかし必ずしもそうとばかりは言えない。なぜなら夢は夢としてはっきりと描かれているからである。だとすれば現実と夢との中間の領域において何かが起っているのである。

### Ⅲ シンクレールの成長

ここでは主人公シンクレールの内的な発展の過程を眺めて行きながら、そのつど、問題となる個所の解釈を試み、さらにⅡで説明を保留しておいた問題を解明して行くつもりである。

物語はエーミル・シンクレールの少年時代のある深刻な体験から始まる。しかし厳密に言うならば、本来の物語の始まる前に、4ページにわたって、標題になっている「二つの世界」についての叙述がある。一つの世界は、狭くはあるが親しみの深い、なごやかさと明朗さの支配する父の家、他の一つは、それをとりまく、恐ろしいなぞめいたことの色々存在する世界である。そしてこの第一の世界は少年にとっては、いわば外の世界から身を守ってくれる城のような存在であるとい



える。即ち外の世界からは「一飛びで母のもとへ逃げて行くことができた」<sup>44</sup>のである。ところがこの城の力が全く失われてしまうような事件が起るのである。リングを盗んだという作り話を得意になってするシンクレールに、思いもかけず年上の少年の悪意極まる脅迫が襲ってきたのであった。細かな筋書きを述べることは省略するが、要するに不良少年クローマーによる2マルクの強要は少年にとってただならぬ出来事であり、ここで彼は嘘をつくという悪によって、さらに本当の盗みを犯すという二重の悪の中にはまり込んでしまったわけである。クローマーの脅迫の模様と、それに脅える少年の心の動きはこの上なく巧みな筆致で描かれており、読者は息もつかずに読んでしまうであろう。少年の世界はそれ自身一つの別の世界をなしているのであって、決して大人の立入りを許さないことをこの個所はわれわれに教える。大人が救いの手を出せばすぐにも解決できると思われるような、たわいがないともいえるこの脅迫事件が、少年の全生活をその根底から揺り動かしてしまうのである。シンクレールはそれを「運命」とさえ呼んでおり、やさしい母の手すらとどかないのである。

《Schicksal lief mir nach, Hände waren nach mir ausgestreckt, vor denen auch die Mutter mich nicht schützen konnte, von denen sie nicht<sup>45</sup> wissen durfte.》

一方、苦しむ少年の心など全然わからぬ父が、少年の靴がぬれているというような些細なことを咎めた時、父に対して彼は優越感と輕蔑感さえ抱くのである。子供の心と大人のそれとの断絶が全くみごとに描かれているところである。ここでわれわれは、最も身近にありまた最大の保護者であるはずの両親が、息子に対して何ら為すすべを知らず、少年自身が自分の罪を自分で解決しなければならないというこの事実注目しなければならない。なぜならこのようなことはシンクレールが後にも何回か経験することなのであるから。こうして第1章はシンクレールの不安が未だ解消せぬままに終る。

第2章において、シンクレールよりも年上の生徒デミアンが現われ、彼を苦しみから救うことになる。一体デミアンというこの謎めいた人物の実体が何であるのかということは後ほど考察するとして、われわれはまず特徴ある彼の様子を眺めてみる必要がある。彼は「外見よりははるかに年長らしく、少年という印象を人に与えず」、「大人のように、異様に出来上った様子」をし、「賢く、明敏で非常にしっかりとした顔」をしている。この「大人（のように）」という言葉が繰返し用いられていることには何か意味がありそうである。——《und seine<sup>46</sup> [Demians] Augen hatten den Ausdruck der Erwachsenen》——《Auch dies



Grüßen, obwohl er unsern Schuljüngerton dabei nachmachte, war so erwachsen und höflich.<sup>46</sup> — 《es war, als rede ein Erwachsener mit mir [Sinclair].》<sup>47</sup> — 《Wie hatte sein Auge, sein merkwürdiges Auge eines Erwachsenen, dabei wunderbar geleuchtet!》<sup>48</sup> — 《und nie war sein Blick mehr der eines Erwachsenen, eines Überlegenen und Durchschauenden gewesen als jetzt.》<sup>49</sup> そしてさらに顕著なことは、この外見的に大人らしい少年がカインとアベルの話を彼独自のやり方で解釈してみせて、シンクレールを驚かすのである。即ち、額にしるしのある、弟殺しのカインを非凡な勇気ある人間だというのである。これは一つには、シンクレールの心に物事の新たな見方を導入しようとすると共に、無意識の中に彼に力を植えつけようとするデミアンの試みであると解せられよう。シンクレール自身、父に対して軽蔑の気持をいだいた時、自分がカインであり、しるしをもったのだと漠然と感じたではないか。そしてデミアンの中にカインの姿を想像したシンクレールは、すでに無意識の中に何か力強いものを予感していたといえよう。

さて、不良少年クロマーはさらに姉を連れ出すようにとシンクレールに迫るのであるが、彼は拒絶の決心をする。そしてクロマーの仕返しに脅えるのであるが、その時デミアンが姿を現わし、「読心術」によってシンクレールの心の中をすべて読みとってしまうのである。デミアンがその時シンクレールに対して強調したのは恐れを抱くなということである。

《Es gibt Dinge, vor denen du [Sinclair] Furcht hast; es gibt auch Menschen, vor denen du Furcht hast. Und das sollte man nie haben. Nein, vor Menschen sollte man niemals Furcht haben.》<sup>50</sup>

そしてさらに、クロマーから離れるように繰返し忠告し、次のように言う。

《Wenn es gar nicht anders geht, dann schlage ihn [Kromer] tot! Es würde mir imponieren und gefallen, wenn du es tätest. Ich würde dir auch helfen.》<sup>51</sup>

シンクレールはこの言葉を聞いてまたもやカインの物語を思い出すのである。ところで、このことがあって後シンクレールはもはやクロマーの脅迫から完全に逃れるのである。このように眺めてくる時、われわれは第2章の標題である「カイン」の意味がよく理解出来るのである。それは換言すれば、カインのように恐れなき者になれ、ということの意味している。大人のように力強いデミアンが、びくびくするシンクレールを励まし勇気づけたのである。

第2章までは、シンクレールの苦しみはもっぱらクロマーの威しという外部



世界からの出来事に基いたものであった。ところが今度はそれがシンクレール自身の内部から生じてくるのである。少年シンクレールに新たに襲って来た罪の意識は、性の目覚めという内的な出来事によるものである。「許された明るい世界ではもぐりこんで隠れていなければならない一つの根本本能<sup>52</sup>」が幼年時代の楽園を徹底的に破壊してしまうのである。前にも述べたように、ここでもまたシンクレールは両親の手の届かぬ領域に入ってしまうのである。

《Wie fast alle Eltern, so halfen auch die meinen nicht den erwachenden Lebenstrieben, von denen nicht gesprochen ward. Sie halfen nur, mit unerschöpflicher Sorgfalt, meinen hoffnungslosen Versuchen, das Wirkliche zu leugnen und in einer Kindeswelt weiter zu hausen, die immer unwirklicher und verlogener ward.<sup>53</sup>》

しかし彼にはすでに自立の気配が感じられる。なぜなら両親を非難せず自ら問題を解決しようとする心構えをもっているからである。——《Es war meine eigene Sache, mit mir fertig zu werden und meinen Weg zu finden.<sup>53</sup>》そして以前のように両親の世界に帰り助けを求めようという態度はもはや全然みられないのである。

ところで今やまたデミアンは堅信礼前の授業の時間の後で、二人の罪人に対する彼独自の解釈をシンクレールに語る。処刑を目前にして悔い改めるよりも、最後まで改心しない罪人の方を称えるのである。これを聞いたシンクレールの心はカインの話の時のようにまたもや混乱するが、結局デミアンのこの話も前と同じく、シンクレールに自己の進むべき方向を示してやったといえる。

《Wenn du [Sinclair] heute einen von den beiden Schächern zum Freund wählen müßtest oder dich besinnen, welchem von beiden du eher Vertrauen schenken könntest, so ist es doch ganz gewiß nicht dieser weinerliche Bekehrte. Nein, der andere ist's, der ist ein Kerl und hat Charakter.<sup>54</sup>》

ただわれわれはデミアンが単に悪人を称えているのではないことをこのパラドックスの中に読みとらねばならない。自己の道を進まずして、すぐにも神の膝元に逃げようとする弱い人間に対するデミアンの軽蔑がこの言葉の中にこめられていると見るべきである。それと同時に、この神に対する彼の批判が述べられる。それはキリスト教的な思考方法に対する正面からの反論であり、まことに厳しいものである。

《Er [Gott] ist das Gute, das Edle, das Väterliche, das Schöne und auch Hohe, das Sentimentale – ganz recht! Aber die Welt besteht auch aus



anderem. Und das wird nun alles einfach dem Teufel zugeschrieben, und dieser ganze Teil der Welt, diese ganze Hälfte wird unterschlagen und totgeschwiegen. Gerade wie sie Gott als Vater alles Lebens rühmen, aber das ganze Geschlechtsleben, auf dem das Leben doch beruht, einfach totschweigen und womöglich für Teufelszeug und sündlich erklären!<sup>55</sup>」

神が世界の半分しか表わしていないとする考え、また、この文章の後半に見られる性に対する見解は、シンクレールの内的生活を洞察したデミアンが、彼に対し一つの教示を与えていることを意味すると考えられる。事実すこしばかり後の方で、又もやデミアンは同じ問題について触れ、性を神聖視するギリシャ人や他の民族の場合についても語っているからである。ローズはこの問題について次のように論じている。「人間の数々の抑圧された欲望を認識することは、それらを意味深い推進力につくりかえるために必要な条件であるというよりほかはない。ヘッセが『ペーター・カーメンチント』(1904)を書いていた時期には、彼はまたなお、敵意ある『世界』から聖フランシス的な自然との交わりへ引込むことによって救いを得ることを望んでいた。今や彼は、彼の内と外において、自我実現のために積極的に戦うのである。」<sup>56</sup> 第3章では要するに宗教、道德という一般的な問題を述べる形をとってはいるが、真の意図はシンクレール自身の内的な問題の解決を助けることにある。

さて、次にわれわれが特に注目すべきことは、第4章「ベアトリーチェ」から第6章「ヤコブの戦い」にいたるまで、デミアンが第4章の一個所(不良少年となったシンクレールに彼が会う時)を除いて、前面に姿を現わさないことである。彼は旅に出たことになっている。一方、寄宿舎に入ったシンクレールの生活は全く孤独そのものである。しかしそれでいながら彼は遂には飲み仲間のスターにまでなり、放校すらさほど遠いことではない。父の来訪も何の役にもたたない。クリスマス時の帰郷はこの上なく気づまりなものであった。ここでもまた以前と同じく両親の手の届かぬところに彼は達してしまっているのである。ところがそうしたある日のこと彼は公園で一人の美しい少女に出会うのであるが、それ以来、全く奇跡の如くに、すきんだ生活が正しい方向へと向うのである。シンクレールがその少女を一人ベアトリーチェと名づけたのは、言うまでもなくダンテとベアトリーチェとの出会いを思ったことであろう。シンクレールは彼女とはただ一言もかわすことなく、ひたすら憧憬像として彼女をあがめるのである。これは一つには彼の内向的な性格によるものとも考えられる。なぜなら彼は別の個所で恋愛に対して次のように述べているからである。



《Niemand war verletzlicher, niemand schamhafter als ich. Und wenn ich je und je die jungen Bürgermädchen vor mir gehen sah, hübsch und sauber, licht und anmutig, waren sie mir wunderbare, reine Träume, tausendmal zu gut und rein für mich.》<sup>57</sup>

ここに彼が現実の女性に近づかず、もっぱら自己の内部に打ち建てた理想像を崇拜する原因があるのである。しかし彼のこのベアトリーチェ体験が要するにそれまで彼自身苦しんでいた暗い衝動の昇華であることは極めて明確である。——

《Die Geschlechtlichkeit, unter der ich litt und vor der ich immer und immer auf der Flucht war, sollte nun in diesem heiligen Feuer zu Geist und Andacht verklärt werden.》<sup>58</sup> ベアトリーチェ崇拜によるシンクレールの生活の向上の様子はこの上なく美しく描かれており、構成の上では丁度小説全体の中間部にあたり、明らかに一つのクライマックスをなしている。読者はこれによってシンクレールが完全に立直ったと思い、大きな満足感を味わうであろう。しかし実はこのような絶対的な神聖化はいまだ究極的な解決をもたらすものではない。が、それについては後に述べることにする。

ところで第4章の終りで、シンクレールが両親の家の紋章の鳥の絵を描き、自分の名も書かず、送り先のわからぬデミアンにそれを送り、第5章のはじめで、その返事が本の中に挟まっているのを見いだすのであるが、これはまことに奇妙な話といわねばならない。ジオルコウスキーは、その紙切れが、大学で多分デミアンを知っていたであろうドクトル・フォレンによってもたらされたという風に解している。<sup>59</sup>では一体どのようにしてその絵はデミアンに届いたのであろうか。シンクレールはデミアンの昔の住所に送ったと言っているが、この場合そのことは大して意味をもっているとは考えられない。重要なことはただシンクレールがそのような形で手紙を出して返事を受取ったというその事自身ではないのか。これは見方によっては小説に神秘性をもたせ、読者の緊張感を高める手法とも考えられるが、しかし、必ずしも手法ということだけでかたづけられぬものがあるように思われる。ある個所でシンクレールは次のように言う。《Wo war er [Demian]? Ich wußte es nicht. Ich wußte nur, er war mit mir verbunden. Wann würde ich ihn wieder sehen?》<sup>60</sup> 両者が内的に結びついているということ——これはただ皮相的な意味に解すべきではなからう。それはたとえ離れていても互に心が通じ合っていることを表わしていると見るべきである。シンクレールの呼びかけが時と場所を越えてデミアンに通じるのである。事実「呼ぶ」(rufen)という言葉が盛んに用いられているではないか。



さて、「半身を地球の中に入れ、その中から、さながら大きな卵から出ようとするかのように、苦心して脱け出ようとしている」<sup>61</sup>鳥の絵に対し、その鳥の目ざすものがアプラクサスなる神であるという返事をシンクレールは受取る。アプラクサスは「神でも悪魔でもある神」<sup>62</sup>であり、<sup>63</sup>旧約と新約の神が世界の半分しか表わしていないとして不満を述べたデミアンが理想とする神にほかならない。鳥はいうまでもなく人間を、そして卵は古い世界を表わしているのであり、新しく生れ変わるためには古い世界の殻を破って出なければならない。しかも目ざすところは善も悪も同時に肯定されるところである、というのが、第5章の標題の意味であろう。

先にも述べたようにそこではデミアンは前面には現われず、直接シンクレールに話しかけることなくして彼に影響を与えているのである。そして今やデミアンの代役とも言える牧師のピストーリウスがシンクレールの導き手となるのである。ダーレンドルフは本小説の要約を述べている中で、「ピストーリウスはデミアンの仕事と彼から委託された仕事(Auftrag)とを完成するのである」<sup>64</sup>という風に解している。ピストーリウスのもたらす数多くの感化の根本をなしているのは何か。それはデミアンの場合と同様、恐れることなく自己の道を進めという勇気づけである。それは次のような言葉によく表わされている。

《Pistorius, welcher selbst ein ausgewachsener Sonderling war, lehrte mich [Sinclair] den Mut und die Achtung vor mir selbst bewahren.》<sup>65</sup>

《Man darf nichts fürchten und nichts für verboten halten, was die Seele in uns wünscht.》<sup>66</sup> (ピストーリウス自身の言葉)

ピストーリウスの言葉とデミアンの言葉とが一致しているということは(der Gleichklang dieses Zuspuches mit Worten Demians)<sup>67</sup>, シンクレールがデミアンの言葉に対して一層大きな信頼を寄せさせるべく仕組まれた手法とも考えられる。しかしシンクレールは最後には彼から離れなければならない。つまりピストーリウスはあくまで「人間をおのれ自身に導く助けをする」<sup>68</sup>ことに留まっているからである。Iでピストーリウスの姿は精神分析医のラングに似せて描かれていることを述べたが、シンクレールがピストーリウスから離れて行くことについてローズが次のように述べているのは意味あることである。「彼(ピストーリウス)は、精神分析医の役割を演じているのであるが、患者は、独立し癒されるために、最後にはこの医者をはねつけねばならないのである。」<sup>69</sup>

次にわれわれはシンクレールと彼の学友クナウエルとの不思議な関係について少し触れてみたい。性的な問題に悩むクナウエルは、シンクレールに助言を求め



た時、自分自身で解決するように言われたため、絶望のあまり自殺しようとするのであるが、まさにその瞬間にシンクレールが現われて助けるのである。この場面も極めて神秘的な感を読者に与えるのであるが、これは必ずしも現実にそのようなことが起ったと解さなくてもよいのではないか。即ち、クナウエルが自殺の直前になって今一度シンクレールの言葉の真の意味を悟り救われたと解してもよいと思われる。そしてここにおいて重要なことは、これまでずっと他人によって指導されて来たシンクレールが今や他人を導くまでに成長したというこの事実である。

第4章以後際だってみえる特徴は、ベアトリーチェ体験の後シンクレールが絵を描きはじめることである。最初彼は彼女の顔を書くのであるが、彼の筆使いは全く現実ばなれしているように思われる。つまり現実に描いているのかそれとも夢の中で描いているのか区別をつけ難い。

《Mehr und mehr gewöhnte ich [Sinclair] mich daran, mit träumerischem Pinsel Linien zu ziehen und Flächen zu füllen, die ohne Vorbild waren, die sich aus spielendem Tasten, aus dem Unbewußten ergaben.》<sup>70</sup>

出来上った絵は男性のようにもまた女性のようにも見え、そして又デミアンの顔をシンクレールに思い出させるが、遂にシンクレールはそれが自分自身であることに気づくのである。

《Und allmählich kam mir [Sinclair] ein Gefühl, daß das nicht Beatrice und nicht Demian sei, sondern – ich selbst. Das Bild glich mir nicht – das sollte es auch nicht, fühlte ich – aber es war das, was mein Leben ausmachte, es war mein Inneres, mein Schicksal oder mein Dämon.》<sup>71</sup>

この叙述は非常に重要である。なぜなら、その絵こそシンクレールの無意識の中に存在するものを表出していることがこれでわかるからである。ではそれは一体何か。それは「母」への憧憬にほかならない。その絵の表情は「母のよう」なのである。——《Es [das gemalte Bildnis] schien mich [Sinclair] zu kennen, wie eine Mutter, schien mir seit allen Zeiten zugewandt.》<sup>72</sup>

ところが一方、彼は現実のベアトリーチェのことは次第に忘却していく。自分の生活を理想的なものに変えたあのベアトリーチェをどうして彼は忘れていくのであろうか。それは、彼女との出会いがこの上なく神聖な一種の恋愛体験でありながら、いわば生命のかよっていない観念的なものだったからではないか。従って彼の生活を全的に満たすことが出来なかったのであろう。事実又もや生と愛への新たな憧れが彼を悩ませているではないか。



《Die Sehnsucht nach dem Leben blühte in mir [Sinclair], vielmehr die Sehnsucht nach Liebe, und der Trieb des Geschlechts, den ich eine Weile hatte in die Anbetung Beatrices auflösen können, verlangte neue Bilder und Ziele. Noch immer kam keine Erfüllung mir entgegen.》<sup>73</sup>

彼の求める新たな愛は、彼が夢の中に見る「歓喜と身震いとが一しよになり、神へのお勤めであると同時に罪惡であるような抱擁」<sup>74</sup>ということにもうかがわれるように、ベアトリーチェ体験の場合のような一面的なものではもはやなくなっている。

《Wonne und Grauen, Mann und Weib gemischt, Heiligstes und Gräßliches ineinander verflochten, tiefe Schuld durch zarteste Unschuld zuckend – so war mein [Sinclairs] Liebestraumbild, und so war auch Abraxas. Liebe war nicht mehr tierisch dunkler Trieb, wie ich sie beängstigt im Anfang empfunden hatte, und sie war auch nicht mehr fromm vergeistigte Anbeterschaft, wie ich sie dem Bilde der Beatrice dargebracht. Sie war beides, beides und noch viel mehr, sie war Engelsbild und Satan, Mann und Weib in einem, Mensch und Tier, höchstes Gut und äußerstes Böses. Dies zu leben schien mir bestimmt, dies zu kosten mein Schicksal. Ich hatte Sehnsucht nach ihm und hatte Angst vor ihm, aber es war immer da, war immer über mir.》<sup>75</sup>

また別の個所でシンクレールは夢の恋人の姿を「母」,<sup>76</sup>「恋人」,さらには「悪魔」,<sup>77</sup>「娼婦」,<sup>78</sup>「吸血鬼」,<sup>79</sup>「人殺し」と呼ぶ。彼はわが家の紋章の鳥の下を通して入る時に母と抱擁する夢をしばしば見るが、その度にそれが「半ば男のような、半ば母のような大きな女」になるのである。この夢の中の女性こそ彼の求めるエヴァ夫人なのである。なぜならデミアンの母（エヴァ夫人）の写真を見たシンクレールは次のように言っているからである（第7章のはじめ）。《Das war mein Traumbild! Das war sie [Demians Mutter], die große, fast männliche Frauenfigur, [...]》<sup>78</sup>さらに言うならば、紋章の鳥の絵は彼の生家にだけあるのではなく、デミアンの母の住む家にもかけられているからである。シンクレールはその夢の中の女性の肖像を描き、又もやそれを「母」,<sup>79</sup>「恋人」,<sup>80</sup>「娼婦」,<sup>81</sup>「アブラクサス」と呼び、その際に、あの「なんじ、われを祝せずば、去らしめず」(創世記 32章, 26節)の文句を思い出すのである。ここに於いて「ヤコブの戦い」という標題の意味が明らかにされる。自分を祝福して欲しいということはこの場合、彼が「母」の愛を受けたいと願っていること、即ち「すべてを満たして



くれる成熟したキス<sup>80</sup>」を求めることに他ならない。シンクレールの半ば喜びであり半ば恐れであるこの秘密の夢をピストーリウスはすでに見抜いていると解すべきである。なぜなら彼はシンクレールに次のような忠言をしているからである。

《Aber ich sage Ihnen: leben Sie sie, diese Träume, spielen Sie sie, bauen Sie ihnen Altäre! [...] Sie müssen Liebesträume, Liebeswünsche haben. Vielleicht sind sie so, daß Sie sich vor ihnen fürchten. Fürchten Sie sich nicht! Sie sind das Beste, was Sie haben!<sup>82</sup>》

ピストーリウスの助言を受けた後のシンクレールの愛の憧れについてよく観察してみると、以前とは変ってきていることがわかる。かの暗い夢の中に現われた「母のような女」を彼は種々の呼び名で呼んでいたが、彼の求めるエヴァ夫人のことを今や彼は「デーモン」、「母」、「運命」、「恋人」、「女神」とのみ呼び<sup>83</sup>、もはや「悪魔」、「吸血鬼」、「人殺し」のような凄まじい呼び方は決してしないのである。これは恐らく彼がピストーリウスの忠言によって愛に対する恐れを克服したためと考えられる。シンクレールはエヴァ夫人について次のように述べている。《Ihr [Frau Evas] Blick war Erfüllung, ihr Gruß bedeutete Heimkehr.<sup>84</sup>》或は《und ihre Nähe war Liebesglück.<sup>85</sup>》〈Erfüllung〉は彼の心を満たすことを、そして〈Heimkehr〉は心の落ち着くところをいうのであろう。そして、シンクレールとエヴァ夫人との愛が互いに引き合うようになった時、はじめて彼女は彼にキスを与えるのである。これはシンクレールの愛の成就を意味する。

さてここで先に保留しておいた問題、即ちカインのしるしについて今一度考察してみようと思う。シンクレールが自分自身このしるしを持っていると感じた時は二回あった。それは少年時代に父に対して軽蔑感を抱いた時と、ピストーリウスと別れた時であった。この両方の場合に共通なことはそこに一種の反逆の精神が現われていることである。そしてこの問題の謎は第7章において解決される。即ちデミアンはシンクレールがそのしるしを持っていることをはっきり自覚させるのである。

《Es ist unser Zeichen. Du [Sinclair] hast es immer gehabt, darum bin ich [Demian] dein Freund geworden. Aber jetzt ist es deutlicher geworden.<sup>86</sup>》

さらにエヴァ夫人の額にもシンクレールはしるしを認める。——《die freie, fürstliche Stirn, die das Zeichen trug<sup>87</sup>》このしるしをもつ人こそ実は「目ざめたもの<sup>88</sup>」或は「目ざめつつあるもの<sup>88</sup>」であり、且つ「自発的なものとして、共に<sup>89</sup>進み運命の招くところに立つ覚悟をしている」ものである。そしてそのような人



こそ世界を動かす人なのである。これは後の『荒野の狼』(1927)で展開されるアウトサイダーの問題に関連しているといえよう。

一方、鳥の絵について言うならば、シンクレールがそれを描いたということは、すでに彼がそれだけ成長して来たことを示すのであり、それ故デミアンがその絵を受取った時、彼のみならずエヴァ夫人も共に喜んだ(第7章)と解してよかろう。そして最終的にはこの鳥は新しい世界の始まる予感をシンクレールとデミアンに与えることになるのである。

《Da kam über den Himmel weg eine lockere gelbe Wolke getrieben, sie staute sich gegen die graue Wand, und der Wind formte in wenigen Sekunden aus dem Gelben und dem Blauen ein Bild, einen riesengroßen Vogel, der sich aus blauem Wirrwarr losriß und mit weiten Flügelschlägen in den Himmel hinein verschwand.<sup>90</sup>》

ジオルコウスキーはこの鳥が伝統の束縛から抜け出そうとする人類を象徴している旨述べている。<sup>91</sup>ところで上の叙述はあたかも現実に行ったことを伝えているかのようであるが、むしろシンクレールの幻想と考えるべきだと思われる。

さて最後にわれわれは一体デミンなる人物が何物なのかということについて論じたい。多くの研究者がこの問題について述べているのでまずそれを一わたり眺めてみよう。バルはデミアンを「詩人自身の本質的な部分」(Wesensteil)或は「あこがれの姿としての自我」(Traum-Ich)と言い、<sup>92</sup>マッチヒは、デミアンがシンクレールの生活の中に入ってくる現実の人間(Geschöpf)ではあるが、象徴にまで高められていると言い、<sup>93</sup>ダーレンドルフは、「デミアン自身は心像(Bild)である。彼はまたシンクレールの内なる声でもある——どちらでも同じことだ。彼は心像になった内なる声である。その声はただそれ自身で、デーモンとしてシンクレールに影響を及ぼしうるのであり、また彼自身の内にある促えがたいものが彼に向いあって座を占めうるのである。デミアンの使命と意思は、シンクレールの内ですます支配力を得、彼の唯一の实在の場であるシンクレールの心の中へ入り込むことである。シンクレールの発展は彼自身の中においてデミアンが成長することとして理解されねばならない。デミアンは、内なる可能性として、またいまだ形成されずにシンクレールの内にまどろんでいるはかな運命の心像として、シンクレールの内において発展するのである。デミアンが『形姿』(Gestalt)であり、『心像』である限りにおいてのみ、彼は助けを為しシンクレールの心の中で奇跡を行うことができるのであり、またシンクレールが自分自身に到達するための道案内者と助力者になりうるのである」と述べている。<sup>94</sup>マイヤー



は宗教的な観点から、デミアンをアートマン(永遠に変わることなき、個人の精神的  
中核)<sup>95</sup>であるとする。ローズは、「デミアンはシンクレールの psychopompos(霊  
魂を下界へ導く案内者)<sup>96</sup>である」と言い、一応現実の人物とは切り離して考えてい  
る。セラルノは、「デミアンはシンクレールから決して切り離されることがない  
故に、実際には肉体をもった人間ではない。要するにデミアンは、シンクレール  
自身、彼の最も奥深い自我、われわれみんなの心の奥底に存在している一種の原  
型的な英雄である。デミアンはいつも変わることなく、触れられることのない本質  
的な自己である」<sup>98</sup>と言う。さらに、ジオルコウスキーは、デミアンがシンクレ  
ールのデーモンであることを認めながらも、彼が単にシンクレールの想像の産物で  
あるにはあまりにも多く小説の筋とかかわりあいをもっている点を挙げ、先のダ  
ーレンドルフの意見に反対している。<sup>99</sup>ジオルコウスキーはまた、本作品の宗教的  
色調と、デミアン自身の数々の特徴、即ち彼の額の輝き、彼の行う奇跡的な行為、  
自分の人格によって他人を癒すこと、譬え話による教化、やがて到来する新たな宗  
教的王国について説くこと等を挙げ、それに加えて本小説の最後のところで、「彼」  
という人称代名詞の頭字が大文字になっている点(《mein [Sinclairs] eigenes  
Bild, das nun ganz Ihm gleicht, Ihm, meinem Freund und Führer》<sup>100</sup>)  
を指摘することによって、デミアンがキリストの姿として神格化されていると  
言うのである。<sup>101</sup>われわれとしてはデミアンをシンクレールのデーモンと解する  
ことに原則的には異議はないが、彼を現実の血の通った人間とみなしてもよく、  
その場合には、読者に常に好奇心と緊張とを呼びさまさせ、作品全体を神秘化す  
る不可思議な人物としてわれわれの目に映るのである。従って読者は絶対にデ  
ミアンをデーモンであるとか、或は現実の人間であると決めつけることは出来な  
い。デーモンとのみするにはあまりに具体的な存在であるし、一方、現実の人間  
とのみみなすにはあまりに神秘的な感がするからである。やはりマツチヒの言う  
ように、象徴にまで高められているとするのが妥当だと思われる。少年シンクレ  
ールをクローマーの脅迫から守り、カインや罪人の話をするデミアンは、たとえ大  
人びてはいても現実に存在する聡明な人間と見て全く無理がない。ところが同時  
にデミアンはまたシンクレール自身の声なのである。

《Wie im Traum unterlag ich [Sinclair] seiner [Demians] Stimme, seinem  
Einfluß. [...] Sprach da nicht eine Stimme, die nur aus mir selber kommen  
konnte? Die alles wußte? Die alles besser, klarer wußte als ich selber?》<sup>102</sup>

さて次にわれわれは、クルチウスが深く感銘を受けているデミアンの言葉につ  
いて少し考えてみたい。それは重傷を負ったデミアンが、同じく傷ついたシンク



ルールに話す最後の言葉である。

《Kleiner Sinclair, paß auf! Ich werde fortgehen müssen. Du wirst mich vielleicht einmal wieder brauchen, gegen den Kromer oder sonst. Wenn du mich dann rufst, dann komme ich nicht mehr so grob auf einem Pferd geritten oder mit der Eisenbahn. Du mußt dann in dich hinein hören, dann merkst du, daß ich in dir drinnen bin.》<sup>103</sup>

クルチウスはこの言葉について、「素朴で深遠な知らせ(Botschaft)である。ヘッセの作品に於いて、いかなるものもこの言葉には及ばない。人は、そういうことはただ一度しか言わないものである」と述べているが、この一見見落されそうな言葉こそ実はデミアンの実体を暗示していると思われる。デミアンを現実の人間とみなしてもこの言葉は全然抵抗なく受け入れられよう。いやむしろこの個所ではデミアンはシンクレールのデーモンではなく現実の人間と見なした方が、その言葉が生き生きしてくるのではなかろうか。デミアンは死ぬが、彼はそのままシンクレールの中に生き続けるのである。そしてこれからも絶えず彼の心と呼びさますであろう。またシンクレールは呼びさまされた自分の心に常に忠実に耳を傾けつつ進むであろう。彼の心の中には、呼びさえすれば、いつどのようなところにおいてもデミアンが現われるのである。こうして今やデミアンの死によってシンクレールの完全な一人だちが可能となったわけである。ジオルコウスキーはデミアンの中にキリストの姿を見たが、「呼ぶ」(rufen)ということに注目するならば、何か仏教の念仏のようなものが想起される。ヘッセがそのことを意識していたか或はクルチウスの感銘がその点に触れてのものかどうかは全く不明であるが、確かにこの rufen という言葉は含蓄の多いものである。

#### Ⅳ 新たなものの到来

Ⅲに於いては主としてシンクレールの成長の過程をやや詳細に述べてきたのであるが、『デミアン』は単にそれを描くにとどまっていない。そこには古い時代の殻を破り、新しい時代を迎えようとする意識が強烈に表明されている。シンクレールも先に述べた羽ばたく鳥の幻想の中にそれを予感するのであるが、そのことは同時にヨーロッパの若い世代に同じような意識を植えつけようとする意図、即ち戦争によって痛めつけられた彼等に新たな世界の建設への意志を喚起せしめようとするヘッセの意図のあらわれであると解せられよう。しかしその世界は必ずしもジオルコウスキーが言うような「宗教的な王国」<sup>104</sup>である必要はないと思われる。デミアンはシンクレールに墮落したヨーロッパを批判する。



《Überall, sagte er [Demian], herrsche Zusammenschluß und Herdenbildung, aber nirgends Freiheit und Liebe. Alle diese Gemeinsamkeit, von der Studentenverbindung und dem Gesangsverein bis zu den Staaten, sei eine Zwangsbildung, es sei eine Gemeinschaft aus Angst, aus Furcht, aus Verlegenheit, und sie sei im Innern faul und alt und dem Zusammenbruch<sup>105</sup> nahe.》

彼の批判はもっぱらこの「衆愚人の団体」に向けられている。他の個所にも同じ言葉や同義の言葉＜warme Herdennähe<sup>107</sup>, <Herde><sup>108</sup>が使われている。即ち、人々は何の信頼感も持ちあわせず、悪意を持ちながらも、ただ離れていることを恐れて群をなしているにすぎないのである。では人間同志の真の繋がりは何によって可能になるのか。それは徹底的に孤独を味わうことによって可能になるのである。

《Ich [Sinclair] lernte, ich lang Vereinsamter, die Gemeinschaft kennen, die zwischen Menschen möglich ist, welche das völlige Alleinsein gekostet<sup>109</sup> haben.》

そしてこのような孤独に徹した人こそ衆愚人とは異なった、「しるしをもった人」, 「目ざめた人」なのである。

《Und wir empfanden einzig das als Pflicht und Schicksal: daß jeder von uns so ganz er selbst werde, so ganz dem in ihm wirksamen Keim der Natur gerecht werde und zu Willen lebe, daß die ungewisse Zukunft uns zu allem und jedem bereit finde, was sie bringen möchte.<sup>110</sup>》

集団の保護のもとに逃げず、真に自己の中から聞えてくる声に耳を傾けるといふこのような自覚的な態度こそ衆愚人のそれとは根本的に異なるのであり、又そのような心構えがあってこそはじめて新しい世界を打ち建てるのが可能であるといえよう。生ぬるい衆愚人の批判と共に、ヘッセが批判しようとしたのは何であらうか。それはヨーロッパの物質文明の発達とそれによってひき起された精神の荒廃であった。

《Und aus allem, was wir sammelten, ergab sich uns die Kritik unserer Zeit und des jetzigen Europa, das in ungeheuren Bestrebungen mächtige neue Waffen der Menschheit erschaffen hatte, endlich aber in eine tiefe und zuletzt schreiende Verödung des Geistes geraten war. Denn es hatte die ganze Welt gewonnen, um seine Seele darüber zu verlieren.<sup>110</sup>》

古い世界は、戦争という形で壊されようとする。が、ローズは、これはヘッセ



が戦争を肯定しているのではなく、精神による世界の造り直しを意味している旨述べている。<sup>111</sup>そしてシンクレールの成長とヨーロッパの生れ変りとが時間的に一致している点に、本小説の深遠な意味があるように思われる。「終りの始まり」という第8章の全く奇妙な標題は、古い世界の崩壊が同時に新しい世界の始まりになっていると解されはしないか。そして同時にそれはシンクレールの古い自我が崩壊して新しい自分に生れ変わったことを意味しているのではあるまいか。

## 文 献

### Texte :

Hermann Hesse, Gesammelte Schriften III, IV, VII. Berlin/Frankfurt a.M.: Suhrkamp 1958. (=GS III, IV, VII)

### Literatur zu Hermann Hesse :

H. Ball, Hermann Hesse. Sein Leben und sein Werk. Berlin/Frankfurt a. M.: Suhrkamp 1956. (=Ball)

R. B. Matzig, Hermann Hesse. Studien zu Werk und Innenwelt des Dichters. Stuttgart: Reclam 1949. (=Matzig)

G. Mayer, Die Begegnung des Christentums mit den asiatischen Religionen im Werk Hermann Hesses. Bonn: Ludwig Röhrscheid 1956. (=Mayer)

E. R. Curtius, Hermann Hesse. In: Kritische Essays zur europäischen Literatur. Bern: Francke 1950. Dritte Auflage 1963. (=Curtius)

M. Dahrendorf, Hermann Hesses «Demian» und C.G. Jung. In: Germanisch-Romanische Monatsschrift. Heidelberg. Neue Folge Bd. 8, H. 1, Januar 1958, S. 81-97. (=Dahrendorf)

Das Werk von Hermann Hesse. Ein Brevier. Herausgegeben von S. Unseld. Frankfurt a. M.: Suhrkamp 1952. (=Unseld)

Hermann Hesse. Eine Chronik in Bildern. Bearbeitet und mit einer Einführung versehen von B. Zeller. Frankfurt a. M.: Suhrkamp 1960. (=Chronik)

T. Ziolkowski, The Novels of Hermann Hesse. A Study in Theme and Structure. Princeton: Princeton University Press 1965. (=Ziolkowski)

E. Rose, Faith from the Abyss. Hermann Hesse's Way from Romanticism to Modernity. London: Peter Owen 1966. (=Rose)

M. Serrano, C. G. Jung and Hermann Hesse. A Record of Two Friendships. Translated from the Spanish by F. MacShane. London: Routledge & Kegan Paul 1966. (=Serrano)



高橋健二, 『ヘッセ研究』ヘッセ全集別巻, 新潮社, 昭和35年。(=高橋)

Literatur über Allgemeines:

Kleines literarisches Lexikon. Vierte, neu bearbeitete und stark erweiterte Auflage. Dritter Band, Sachbegriffe. In Fortführung der von W. Kayser besorgten zweiten und dritten Auflage herausgegeben von H. Rüdiger und E. Koppen. Bern und München: Francke 1966. (=KLL)

Philosophisches Wörterbuch. Begründet von H. Schmidt. Siebente Auflage. Durchgesehen, ergänzt und herausgegeben von G. Schischkoff. Stuttgart: Alfred Kröner 1965. (=PhWB)

注

- <sup>1</sup> Unseld S.22 全集版にも1914年9月とある(GS. VII S.44)。但し Chronik (S.78)では11月3日とある。従って同じ文をヘッセは二回発表したと考えられる。  
<sup>2</sup> 戦争に狂奔する詩人, 芸術家, ジャーナリスト等に, 冷静になるようにと訴えた文。GS. VII. S.44-49 参照。  
<sup>3</sup> Unseld S. 22    <sup>4</sup> Ball S. 134-135; Unseld S. 24; Chronik S. 82, 202; 高橋 S. 125-126    <sup>5</sup> GS. IV. S. 478; Unseld S. 24    <sup>6</sup> Ball S. 141    <sup>7</sup> Ball S. 142-143    <sup>8</sup> Ball S. 142  
<sup>9</sup> GS. IV. S. 478    <sup>10</sup> Ziolkowski S. 5    <sup>11</sup> GS. IV. S. 480; Ball S. 163    <sup>12</sup> Ziolkowski S. 4    <sup>13</sup> Unseld S. 24-25    <sup>14</sup> Ziolkowski S. 1  
<sup>15</sup> Chronik S. 86    <sup>16</sup> GS. III. S. 101    <sup>17</sup> GS. III. S. 102  
<sup>18</sup> Ziolkowski S. 90    <sup>19</sup> Ziolkowski S. 91    <sup>20</sup> Ziolkowski S. 100  
<sup>21</sup> Ziolkowski S. 119    <sup>22</sup> 厳密に言うならば, 本小説中に描かれている出来事は, 時間的には聖書のそれよりも後に来るから, 即ち聖書の出来事を模倣したわけであるから, Postfiguration(後示)と言うべきである。この問題についてはKLLのFiguraldeutungの項を参照。  
<sup>23</sup> Ziolkowski S. 120    <sup>24</sup> Ziolkowski S. 94    <sup>25</sup> Ziolkowski S. 91    <sup>26</sup> Ziolkowski S. 93    <sup>27</sup> GS. III. S. 127-128    <sup>28</sup> GW. III. S. 128    <sup>29</sup> GS. III. S. 137    <sup>30</sup> GS. III. S. 142    <sup>31</sup> GS. III. S. 148    <sup>32</sup> GS. III. S. 156    <sup>33</sup> GS. III. S. 165    <sup>34</sup> GS. III. S. 219    <sup>35</sup> GS. III. S. 124    <sup>36</sup> GS. III. S. 182  
<sup>37</sup> GS. III. S. 183    <sup>38</sup> GS. III. S. 231    <sup>39</sup> GS. III. S. 233    <sup>40</sup> GS. III. S. 184    <sup>41</sup> GS. III. S. 213    <sup>42</sup> GS. III. S. 224    <sup>43</sup> GS. III. S. 129    <sup>44</sup> GS. III. S. 104    <sup>45</sup> GS. III. S. 113    <sup>46</sup> GS. III. S. 123  
<sup>47</sup> GS. III. S. 124    <sup>48</sup> GS. III. S. 128    <sup>49</sup> GS. III. S. 133    <sup>50</sup> GS. III. S. 133    <sup>51</sup> GS. III. S. 137    <sup>52</sup> GS. III. S. 143    <sup>53</sup> GS. III. S. 144.    <sup>54</sup> GS. III. S. 155    <sup>55</sup> GS. III. S. 156    <sup>56</sup> Rose S. 55  
<sup>57</sup> GS. III. S. 169-170    <sup>58</sup> GS. III. S. 174    <sup>59</sup> Ziolkowski S. 92



- 60 GS. III. S. 190    61 GS. III. S. 183    62 GW. III. S. 187    63 ア  
 プラクサスの神についてはダーレンドルフ (S.92) が次のように説明している。  
 「歴史的な意味でのアプラクサスはエジプトのミトラ(光と真理、後には太陽の神)  
 の兄弟である。彼はグノーシス派の人々にとっては一年の全部を意味していた。  
 即ち、彼の文字の数値は 365 となり、つまりそれは一年の日数である。同時に彼  
 はその 7 つの文字でもって、グノーシス派の人々の 7 つの天——それは古代の占  
 星術の信仰に従えば 7 つの遊星の神によって支配されていた——を象徴してい  
 る。彼はギリシャのデミウルゴスと同じく、世界を創造する 7 つの力を一つにま  
 とめているところの最高の神、創造の神である。一年の単位を表わすものと  
 て、彼は全なるものの象徴であるのみならず永遠を象徴するものである。」
- 64 Dahrendorf S. 82    65 GS. III. S. 202    66 GS. III. S. 205  
 67 GS. III. S. 206    68 GS. III. S. 220    69 Rose S. 53    70 GS.  
 III. S. 176    71 GS. III. S. 178    72 GS. III. S. 177    73 GS. III.  
 S. 187-188    74 GS. III. S. 188    75 GS. III. S. 188-189    76 GS.  
 III. S. 190    77 GS. III. S. 203    78 GS. III. S. 223    79 GS.  
 III. S. 211    80 GS. III. S. 190    81 ここで母ということを理解するため  
 にバルの説明に耳を傾けよう。バルは『ヘルマン・ラウシャー』(1901)において  
 すでに母のテーマがあらわれていることを指摘し、それ以後ある種の根源的な故  
 郷(Urheimat)への憧れ、あらゆる生の源泉への憧れ、生れ変り(Wiedergeburt)  
 の隠蔽的なふところへの憧れが表明されるが、思い出自体は詩人の母であり、彼  
 は繰返し繰返し、意識的なものから遠ざかった言い表わし難いものの領域を廻る  
 旨述べている(Ball S. 138)(圈点は筆者)。バルのこの言葉から、母は万物を生み  
 出す根源的な力、そして人間にあっては無意識の中にある一種の名づけがたい力  
 であるといえよう。
- 82 GS. III. S. 205    83 GS. III. S. 224, 233  
 84 GS. III. S. 232    85 GS. III. S. 233    86 GS. III. S. 226    87 GS.  
 III. S. 232    88 GS. III. S. 236    89 GS. III. S. 238    90 GS. III.  
 S. 245    91 Ziolkowski S. 117    92 Ball S. 64    93 Matzig S. 29  
 94 Dahrendorf S. 85    95 PhWB S. 39    96 Mayer S. 96-97  
 97 Rose S. 52    98 Serrano S. 4    99 Ziolkowski S. 141-142  
 100 GS. III. S. 257    101 Ziolkowski S. 139-140    102 GS. III.  
 S. 135    103 GS. III. S. 256    104 Ziolkowski S. 139    105 GS. III.  
 S. 227    106 GS. III. S. 228    107 GS. III. S. 225    108 GS. III. S. 226  
 109 GS. III. S. 236    110 GS. III. S. 238    111 Rose S. 55

なお、『自伝素描』の訳文は高橋健二氏のもの(ヘッセ全集第10巻, 新潮社,  
 昭和32年)を拝借した。